イタリア古典歌曲に G.フレスコバルディ『そよ風が愛らしく吹けば(Se l'aura spira tutta vezzosa)』という歌がある。拙訳で恐縮だが、意味は「そよ風が愛らしく吹けば、新鮮なバラは楽しげだ。美しいエメラルドグリーンの生垣の影で夏の暑さを気にすることなく。踊りなさい、楽しげに揺れなさい。ニンフは好む、美しい花を。今、同じように泉が澄み渡り、山から海へ向かう。その甘美な詩は鳥を思わせ、若木は花で覆われる。日陰側の美しい面に、天は哀れみを感じて誇りを与えるでしょう。歌いなさい、ニンフが好む歌で、彼らにつれない風を追い払いなさい」という内容で、実に美しい情景だ。

まずギリシャ神話で、「アウラ(aura)」というのは「そよ風の女神」のことで、後にゼウスによって「泉」に変えられた。ニンフとは女神「ニュンペー」のほか、山・川・森・谷などを守護する精霊もしくは下級女神全般を指す。さらにニンフは歌と踊りを好む。したがって順当に解釈すると「愛らしく踊っていたそよ風の女神は泉に変えられてしまった。けれど泉となった今、その流れはオリンポスの山から下り広く愛らしく歌う。踊れなくなっても歌で愛を与え続ける女神よ、さあ歌いなさい。ニンフたちの喜びは自然に繁栄をもたらす。愛をささやく鳥のような甘美な歌で自然を守る者につらく当たる風を追い払いなさい」という感じだろうか。

さて、先は神々の世界の光景であるが、メタファーではないけれど、私はこれを人間界に置き換えてみたくなった。「aura」という神話の固有名詞から離れて「そよ風」という単語と解釈すると、「そよ風」＝「西風」＝「春風」となる。いずれも愛の到来を表す風である。「若木は花で覆われる」と訳したが、この「花で覆われる」には「繁栄する」「青春の盛り」という意味もある。ついボッティチェッリの「プリマヴェーラ」の画面を思い出す。ここで人間界に置き換えると、女神を男性化することになるが、古代ギリシャの男性間の恋、ゼウスの好色、いろいろあるので、この擬人化もどうか平にお許し願いたい。

そこで人間界変換恋愛物語。そよ風＝男性、ニンフ＝女性と仮定する。物語の美を損なわないために一応ヴィジュアル系で表現する。「若く美しい男性が愛をささやくと、恋に目覚める年頃の初々しい娘は嬉しそうだ。その情熱を恐れることなく、森の緑の影で愛を交わす。恋の情熱を楽しみなさい。女性は甘い囁きを好む。今、その恋の感情は高いところから低いところに流れるように広く全身に行き渡る。その甘美な恋で青春は花盛り。それは今まで眠っていた自分の魅力を照らし出すでしょう。男性諸君、愛を歌いなさい。恋する娘たちを冷たい風から守りなさい」としてみたが…あ、フレスコバルディさん！卒倒しないでください。大丈夫ですか？

以上の前半はベル・エポック期シャンソン・フランセーズの春の歌によく現れる光景である。昔から恋に目覚めた若者が愛を交わす場所は、人目につかない森の中と決まっていた。ただしシャンソン・フランセーズでは恋することを「folie(狂気、錯乱)」という単語で表すように、文字通り「恋狂い」状態に陥るが、春が過ぎると簡単に別れたりする。すなわち「恋」の感情自体を楽しむ傾向があった。「恋」がなければ人生の意味がないというほどに。だからこの変換歌の後半は＋αの進展となるが、実際恋は内気な人にとって自分の魅力を発見し、磨ける機会であるのは確かだ。(2013.3.9)